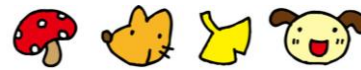


平成 28年 10月 28日

敬愛短大附属幼稚園だより 11月号



豊かなかわりとは



「園長先生！」と大きな声で、園長室を出て職員室に向かっていた私に、年少児クラスのAちゃんが声をかけてきました。振り向くとこちらに走ってきています。私のところにきて、「園長先生、これあげる」と箱の中から大事そうに取り出して手にのせてくれました。ドングリの実でした。Aちゃんにはにこにこうれしそうです。「ありがとう」といって受け取りました。そのドングリには目がかいてありました。わたしとすぐに保育室に引き返しました。きっと、保育室で秋の実をあつめ、お友だちといっしょにつくって遊んでいたのでしょうか。そのどんぐりは園長の机にかざっています。

さて、Aちゃんのことが気になります。子どもの行動には物語があるとよく言われます。そのことの前と後が気になります。なぜ、園長にドングリを渡そうと考えたのか。渡す前までにどんなことがあったのかを知りたいのです。子どもの心の中を想像してみます。子どもがまわりの人にもものをあげるとき、その行為そのものがうれしいのです。きっと保育室で、担任の先生に同じようにドングリの実をあげたのでしょうか。その先生が、とてもうれしそうにそれを受け取って喜んでくれたのではないのでしょうか。ものをあげたいという気持ちをきちんと受け止めてくれる安心感をもったのでしょうか。また、もらったお友だちも喜んでくれたのでしょうか。そのことが園長にわたし行為にまでつながっていったのでしょうか。まわりの人が喜んでくれることを子どもたちはしたいのです。そうした行為は自分につながる人を大切にしたいと考えています。豊かなかわりにつながると考えます。

子どもの何気ない行動に私たち大人は「にこっ」としたり、喜んだり、うれしかったりすることがあります。にこにこ、いつも元気で力いっぱい遊んでいる子どもの姿からも私たち大人は元気をもらいます。子ども達は大人を喜ばせたいと思って行動している時とそんなことをあまり考えず行動している時があります。後者は自然にまわりを明るくしてくれる力を持っています。これは大人にはあまりできません。いつもそうばかりとは言えないのが子育てです。「ママ大好き！」と言いながら「いやだ」「しない」「もうやらない」という反対の言葉を言うのが子どもです。2つの側面を含めて子どもです。そんな時に大人の対応が難しいのです。「いやだ、いやだ」と言いながら案外大人の気持ちが分かっています。「僕はここで自分の気持ちを主張したいんだ、それをすぐに大きな声で大人が否定することに僕は腹が立っているんだ、だからなんでもいやというんだ」、子どもの気持ちはそんなところもあるのではないのでしょうか。ことばでうまく伝えられない分、行動に出ます。

豊かなかわりは、2つの側面を引き受けてかわることだと思います。その子のよさも難しさも丸ごと受け止め、大人がかわることが大切ではないのでしょうか。子どもがしていることに関心をもち、どうすれば子どもが関心をもっていることがうまくいくかを考えることが豊かなかわりにつながると考えています。(山中 護)